

先日の研修では大変お世話になりました。皆様それぞれお忙しい中にも関わらず、暖かく迎えてくださり、また丁寧にご指導くださいましたこと、心より感謝申し上げます。

これまで重症心身障害児のお子さんと接する機会がなかったため、私にとっては見ること・聞くことすべてが興味深く、勉強になることばかりでした。

お子さんたちは様々な困難を抱えながらも、それぞれに穏やかな生活があり（もちろん、時として波乱が生ずるとは思いますが…）、少しずつ自分なりのペースで成長されているということがわかりました。そして、ご家族だけでその生活を支えていくことは極めて困難であり、看護師さんやリハビリスタッフの存在が不可欠であるということを再認識しました。

特別な配慮を要するお子さんばかりですので、関わるスタッフの方々の緊張感もいかばかりかと想像いたしますが、そのようなことを全く感じさせることがない、明るく朗らかな対応が印象的でした。専門職として、冷静かつ現実的な対処をされる一方で、関係スタッフ全員でお子さんを見守り、育んでいこうという温かな雰囲気を感じられました。

STとして働く中で、コミュニケーションとは言葉や表情や身ぶり・手振りだけでなく、「体全体」でするものだと考えるようになりました。例えば、一般的には「コミュニケーション不能」とみなされている重度認知症の患者さんと接していると、たとえ一言も話せなくても、寝たきりでほとんど体動が困難であっても、体全体で微妙なニュアンスを発していることが感じられます。

今回の研修を通じて、重度心身障害児のお子さんに関しても同様のことが言えるのではないかと思います。スタッフの皆様は丁寧な観察により、お子さんたちが発する小さなシグナルやメッセージを汲み取ろうと心がけておられるようにお見受けしました。そして、そのことをごく自然に、さりげなくされていると感じました。

身体というものをどのように捉えるか、コミュニケーションの本質とは何か、全人的な支援とはどのようなものか、等々、改めて深く考えるきっかけを頂けたと思います。

貴重な体験をさせて頂き、本当にありがとうございました。今後とも、ご指導・ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。

2019年5月27日

訪問看護ステーション ユーカリ

今回の実習では、見学させていただいた利用者ご家族と訪問看護師の信頼関係を見る事ができた。

ベテランの母から比較的新米の母までの関わりを見学し、児の状態にもよるがそれぞれ個々に合った関わり方をされていた。所長は、支援学級や通園に看護師が同行することで、実際に母がどのように移動を行いどれくらい大変かがわかるとお話しされていた。そのような関わりの上で信頼関係が構築されていることが想像できた。そして母と訪問看護師の良好な関係は児への安心感につながっていることを実感した。

入浴介助をみても三者三様であり、児の特徴や自宅の環境に合わせた物品、細かな部分の手順が確立されており在宅小児ケアの個別性の高さが伺えた。熟練した訪問看護師であっても、納得がいくまで何度も聴診器をあてる姿が印象的であり自分もその姿を忘れず、看護を行っていきたいと思った。

2019年5月20日 実施